

# 独自性もつ日本語を大切に

## 郡千寿子副学長

弘前大

@島根・松江南高

日本語学を専門にする弘前大（青森県）副学長の郡千寿子教授は、「ことばで日本再発見」のテーマで、松江市の島根県立松江南高校2年の約260人に講義した。

祖母が松江市生まれという郡教授。「ぜひ島根に一度来たかった」と生徒たちにあいさつし、出雲弁と東北弁の方言が似ていて作家・松本清張の代表作「砂の器」のミステリーの鍵になった話題にも触れた。

初めに、元号「令和」の出典となった万葉集について、中国の漢字を借り、漢字ばかりの万葉仮名で表記していることを紹介。「その後、漢字からカタカナ、ひらがなを考案し、千年かけて、表音文字、表意文字が組み合わさった世界でも唯一の日本語のシステムができた」と話した。

また、万葉集では、恋を「孤悲」と表記していると、古代の恋は、共生した

いが果たされず、一人孤独を悲しんでいることが察せられ、その対象も季節や植物にまで及んでいることを指摘。「古文を読むと人の営みが今と変わらないことが分かる」と述べた。

一方、現代の日本語については、「自分」を指す呼称が、立場や状況によって

「僕」「俺」になったり、生徒に対して教師が自分を「先生」、子どもに対して親が自分を「お父さん」「ママ」と呼んだりするなど、さまざまに変化するのが特徴の一つとした。「人間関係や場面を重視する相手への配慮からではないか」と説明。最後に「日本語は孤立語と言われるが、みなさんが大切にしなければ衰退してしまう」と締めくくった。

講義後、狩野巧翔さんは「若者言葉についてどう思いますか」と質問。郡教授は「若者は発想が豊かで言語を変える力をもっている。変化を止めることはできないが、美しく上品な日本語も継承してほしい」と話した。新田舞羽さんが「同じものを指す言葉が各地域で異なることをどう思いますか」と尋ねたのに対し、郡教授は「標準語は明治政府が人為的につくったもの。地域の言語や文化を大切にすべきです」と答えていた。



弘前大学 昨年創立70周年を

迎えた。人文社会科学、教育、医、理工、農学生命科学の5学部、7大学院研究科、2研究所等を備える。今年4月、医学部心理支援科学科、大学院地域共創科学研究科を新設する。